現代隨想全集

18

高濱虛子
齋藤茂吉
釋迢空
集

創元社刊

現代隨想全集

第十八卷

昭和二十九年五月三十一日　發行

定價　三八〇圓

著者　高濱虛子　齋藤茂吉　釋迢空

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
發行者　小林茂

東京都大田區田園調布一ノ一三一四
印刷者　淺野剛

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
（大阪市北區樋上町四五）
發行所　株式會社　創元社
電話茅場町一七三四・二〇六四・四〇八三
振替東京一五六五　大阪五七〇九九

印刷　金羊社　製本　小高

落丁・乱丁がありましたら取替へます

現代隨想全集
第十八卷

目次

高濱虛子集

自句自解……二
一行評……四二
古句一百……七〇
立子の句……一〇〇
寫生俳話一則……一二六
俳諧雜筆……一三〇
俳句は花鳥諷詠詩……一三四
新は深なり……一五二
極樂の文學……一五三
年譜に代へて……一五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

解説に代へて……星野立子…一六一
句　評……京極杞陽…一六五

齋藤茂吉集

短歌道一家言……一七五
伊藤左千夫先生……二一〇
正岡子規……二一二
露伴先生……二一五
漱石先生……二一七
寺田博士……二一八
漫　筆……二二一

月雪花……二二七
晩秋小筆……二二九
山水妄想……二三三
曼珠沙華……二三五
籠居漫筆……二三七
一瞬……二四一
最上川……二四九
むく鳥印象記……二五一
孫……二五九
滯歐隨筆……二六四
ドナウ……二六四
玉菜ぐるま……二六五
花を嗅ぐ……二六七
羅馬……二六九

蟬聲……二七一
ニイチェの墓を弔ふ記……二七三

茂吉小話

山道……二八二
蛙……二八四
善根……二八五
忘恩……二八八

童馬山房夜話

漢詩の表現と和歌の表現……二九一
短歌の實用性……二九二
人麿痢病……二九五
直線光……二九六
襟卷……二九七
方言……二九九

萬葉好き、萬葉嫌ひ……三〇〇
芭　蕉……三〇二
古代藝術の讃……三〇五
年　譜……三〇七
解　説……三一五

釋　迢　空　集

山の音を聽きながら……三三一
海道の砂……三三六
萬葉旅行獨案内……三四二
反省の文學源氏物語……三五四
由良助の成立……三六五

春永話……三七二
留守ごと……三七七
姥の話……三八三
倚桃兩嶮……三八六
倚桃兩嶮自讃文……三八九
歌の圓寂する時……四一二
近代小說文體論序……四三一
山越しの阿彌陀像の畫因……四三九
年譜……四五九
解說……加藤守雄……四六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

高濱虛子集

自句自解

俳句外國語譯註釋原文

俳句を佛文、英文、獨文、中華文等に飜譯並に註釋してその面影の一端だけでもそれ等の國の人に知らすことが出來れば幸と思つて自分の句を試みて見たものゝ、その註釋の原文である。

濡縁にいづくともなき落花かな

濡縁に……縁といふのは日本の家屋を最も特色づける處のものであつて、普通の日本の家屋には窓の代りに障子といふ引開けるやうになつてゐる戸が附いてゐて、それを開けると縁に出て、それからすぐ庭に降りられるやうになつてゐる。日本の家屋には疊といふものが敷かれて常に清らかに掃き清められ、又その縁側も美しく掃き拭ぐはれて履物のまゝでは上にあがらない。縁はさういふ働きをするので、部屋と庭との接屬の仲立ちになつてゐるものなのである。縁といふものは普通は夜分になると雨戸といふ外面の戸が引かれて部屋と同樣に閉ぢ籠められて了ふのであるが、濡縁といふ縁になると雨戸の外になつてゐて、夜もすがら外氣に晒されたものであり、雨が降つた時分には雨に濡れたままになつてゐる。普通の縁よりも幅が狹くつて雨晒しになつてゐる爲に普通の縁ほど光澤はないが併し却て物寂びた趣はある。

いづくともなき……どこから來たのであらうか、といふ字義であるが、此言葉から齎す響きに依つて靜かに訝つた感情が出てゐるのである。其邊を見渡して見ると櫻の木は無い、それに此濡緣に二三點の落花がして居る、と餘り大きくはない驚きの心持を敍したのである。

落花かな……日本人は元來櫻といふものを非常に愛好して花といへば櫻のことを表すことになつて居る、その花びらの散つて居るものを落花と稱へて、又之を非常に愛好する。落花の哀れに寂しく美しく靜かなのが日本人の性癖に適して居るのであらう。

この句は濡緣に二三片の落花が見える、どこの櫻の花がこゝまで飛んできたのであらうかと訝りつつ、その花びらの美しく靜かに散つてゐるのを見守つてゐる心持を詠つたものである。時間は夕方でも明け方でもいゝ。その濡緣の落花を見た人の微かな驚き、微かな訝り、落花に對する靜かな愛著の心持、といふやうなものが此句の主要な部分を占めてゐる。

菖蒲剪るや遠く浮きたる葉一つ

菖蒲剪るや……男の子の祝の日になつてゐる端午の節句に菖蒲を剪るといふ習慣があるが、それでもよく、又單に花菖蒲を剪るのでもよい。池のほとりに立つてその菖蒲を鋏で剪ることを言つたのである。

遠く浮きたる……鋏を水中深くさし込んでグサと剪ると、一トかたまりの菖蒲は手の裡に在るのであるが、一つの葉はつゝと外れて遠くの方に浮き出た、恰も水を潜つた人が遠方にひよつこりと頭を出すやうに。

葉一つ……之は前にも言つたやうに、一枚の葉が外れて遠く浮み出たといふのであつて菖蒲の葉は群生して居る劍のやうな葉であつて、大方はかたまつてゐるのであるが、一つの葉は遠く外れて浮き上つたといふので、菖蒲の葉の性質を現して居り、同時に又其菖蒲を剪つた人の其一葉に目を遣つた時の心持が出て居る。

鎌倉

秋天の下に浪あり墳墓あり

鎌倉……といふ前置は、この句は鎌倉といふ古い都を咏嘆したものであるといふことを明かにしたのである。鎌倉といふのは今から七百五十年程の昔、源頼朝といふ將軍が天下を支配してから百五十年ほど續いた最も殺戮の行はれた古い都である。今は美しい大佛があるので世界的に名高い。

秋天の下に……日本の秋は一年中で最も爽やかな好晴の續く時候である。其秋の高いひろ〳〵とした空の下に、といふのである。

浪あり……鎌倉は海岸である。太平洋の浪が其海岸に打よせて來てゐる。秋の空の下に海があり、打寄せる浪があると、先づ一方をいつたのである。

墳墓あり……又一方には澤山の武將が互に戰つて屍を埋めたところである、だからそれ等の墓がたくさんにあるといつたのである。

これをひつくるめていへば、秋の大きな空の下に、片方には太平洋の大浪があり、片方には戰史上有名なたくさんの墓がある、鎌倉といふ所はさういふところであると、浪と墓とでこの古都の感じを

描き咏嘆したのである。

われの星燃えてをるなり星月夜

われの星……天上の無數の星を見て居ると、いろ〳〵神祕な空想を起すものであるが、日本では古來、木星・火星・土星・金星・水星等を人に結びつけ、何年に生れたものは何星に屬するといふやうなことを言ふ。それを一層突き進めて其無數に有る星の中の一つの星を捉へて、あの星が自分である、自分の生命があの星に宿つて居ると觀るのである。

燃えてをるなり……見て居るうちにその星がだん〳〵光を增して來て盛んに燃え立つてゐるやうに見える、といふのである。自分の心が燃え立つて居る、同時にその星が燃えて居るといふのである。

星月夜……日本の秋は最も爽やかな晴れ渡つた時で、從つて其夜空は深く〳〵晴れてゐて星が無數に煌いてゐる、その星の光で恰も月夜の如く明るい、之を星月夜といふのである。

秋の夜空に無數に見える星の中に、自分の星が獨り爛々と燃えてゐるといふのである。

風鈴に大きな月のかゝりけり

風鈴に……風鈴といふのは小さい鈴である。外部は鐵の鑄物で、中には同じく鐵の舌が下がつてゐて其下に紙がくつゝいてをり、風が吹くたびにその舌が外部の鐵にぶつかり涼しい音を發する。これを軒端——或は窓の上部——に吊して置くと、涼しい風が吹いて來ると同時に涼し氣な音を發する。夏愛玩する一種の器であるが、此句ではそれが秋まで吊してある場合を言つたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.